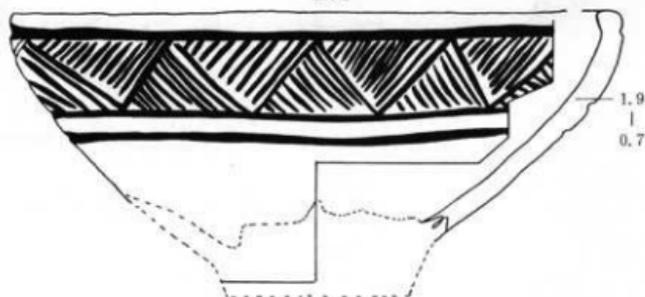


163



AK 2 Ⅲ

- 20.8 -



〔後期の土器〕第4群土器-163

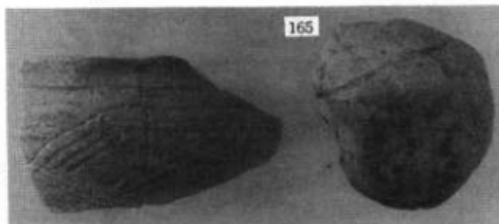
☆ このものは、AK 2 Ⅲ出土の「十腰内Ⅰ式」、「同Ⅱ式」の中間をなす一連の土器群の一つである。

- このものの器形は、鉢形土器で、平縁で肩部～口頸部は、内傾する器形である。このものは、大小破片12ヶで出土したものを復原した。なお、このものの底部は欠失しているため不明である。
- 施文は、口縁が平縁であるが、口縁直下に1条の沈線文がめぐり、胴部上半にも2条の沈線文が施文され、この三者によって区画される口頸部には鋸歯状の沈線によって区画される三角形の中に左下り（右下り）に斜向する沈線が10～12条施文されるものである。胴部下半は無文で研磨されている。（☆沈線と言うよりも刻文と表現する方が良いと考えられる。）☆（このものも、類例を待って再考したい。）
- 色調は、内面黒褐色、外面も黒褐色である。胎土・焼成とも最良で堅緻である。

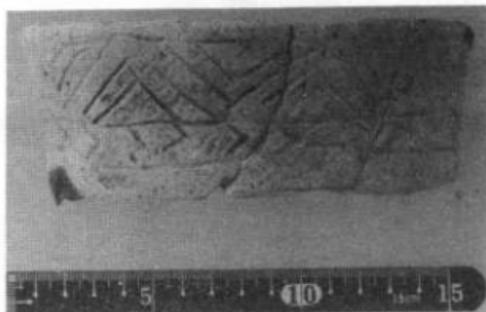
164 AK 1 Ⅱ

165 AK 2 Ⅱ

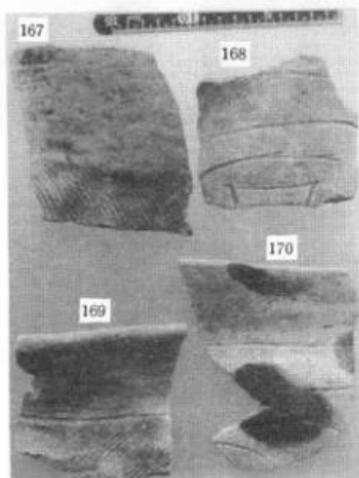
第3群土器



166

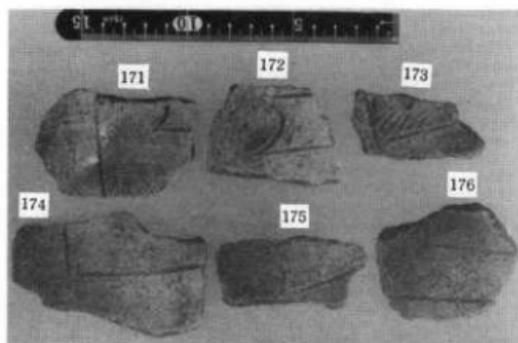


166 AL 1 Ⅲ



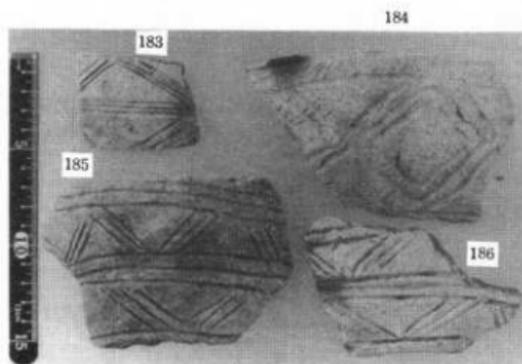
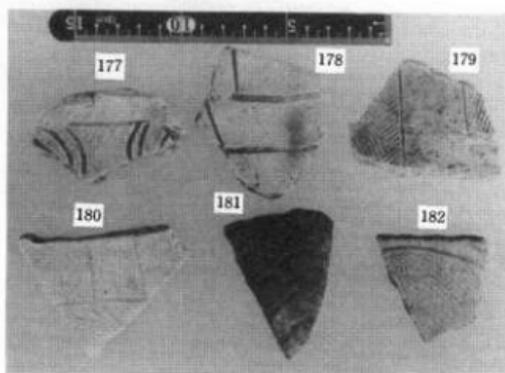
167 AK 1 Ⅱ
168 AN 1 b-B 1 Ⅲ
169 AK 2 Ⅱ
170 AL 1 Ⅲ

- ☆ (164・165)のうち(164)は菱形、(165)は底部である。
- ☆ (166)は「重山形文」と垂下する「鋸歯状文」がある。
- ☆ (167・169・170)は、無文帯—施文帯のパターンを認めるもので、(168)は、方形～菱形区画文が施文されるものである。
- これらの(164～170)は、施文例のサンプルとして掲示した。

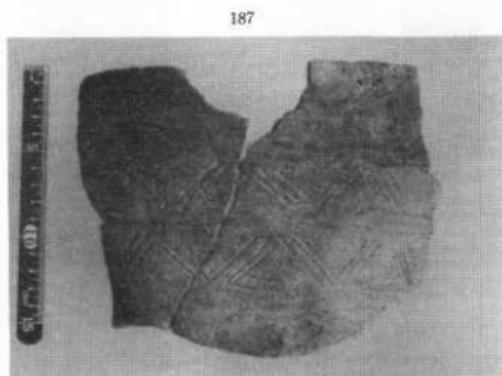


- | |
|-------------------|
| 171 AL 1 II |
| 172 AL 1 II |
| 173 AN 1 b-A 2 II |
| 174 AL 1 II |
| 175 AL 1 II |
| 176 AL 1 II |

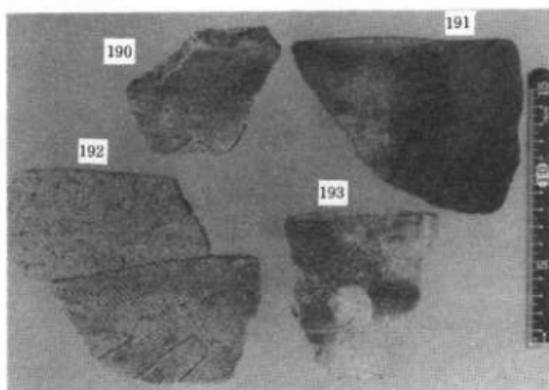
- | |
|-------------------|
| 177 AN 1 b-B 1 II |
| 178 AN 1 b-B 1 II |
| 179 AK 2 II |
| 180 AK 2 II |
| 181 AN 1 b-B 1 II |
| 182 AN 1 b-B 1 II |



- | |
|-------------|
| 183 K 2 II |
| 184 K 2 II |
| 185 K 1 I |
| 186 AL 1 II |

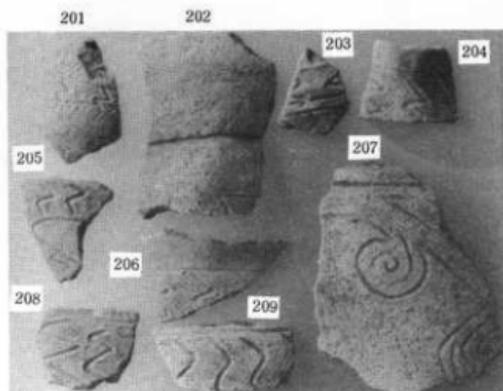
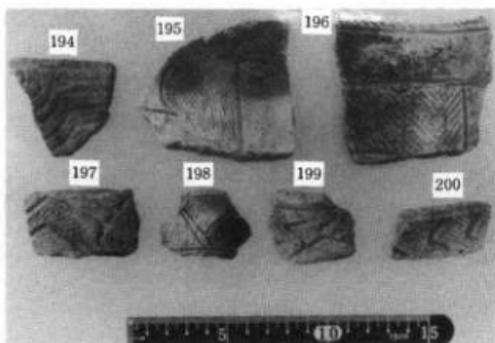


187 AK Ⅱ
188 AN₁b-B₁ Ⅱ
189 AK₁ Ⅱ



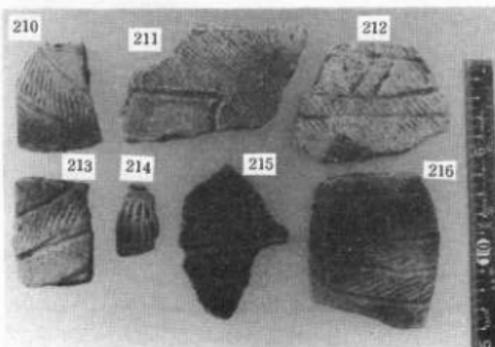
190 AN₁b-A₂ Ⅱ
191 AK₁ Ⅱ
192 AL₁ Ⅱ
193 AK₂ Ⅱ

194 AK 1 Ⅱ
 195 AK 1 Ⅱ
 196 AN 1 b-B 1 Ⅱ
 197 AK 1 Ⅱ
 198 AN 1 b-B 1 Ⅱ
 199 AN 1 b-B 1 Ⅱ
 200 K 2 Ⅱ

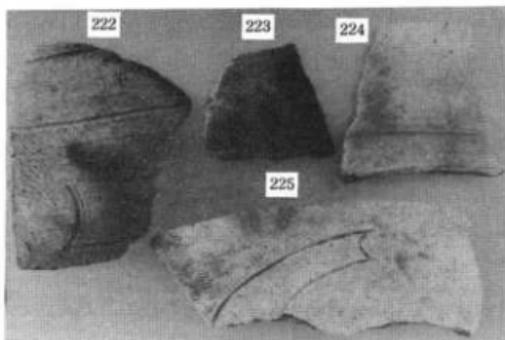


201 AK 2 Ⅱ
 202 AL 1 Ⅱ
 203 AK 1 Ⅱ
 204 AK 2 Ⅱ
 205 AK 1 Ⅱ
 206 AK 2 Ⅱ
 207 AK 2 Ⅱ
 208 AK 1
 209 AN 1 b-B 1 Ⅱ

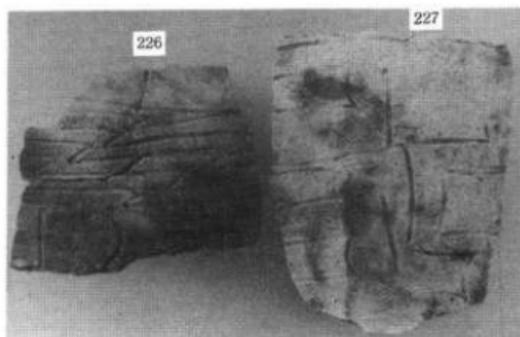
210 M10 Ⅱ
 211 K 1・2 Ⅱ
 212 AL 1 Ⅱ
 213 AL 2 Ⅱ
 214 AN 1 b-B 1 Ⅱ
 215 AN 1 b-A 2 Ⅱ
 216 AN 1 b-A 2 Ⅱ



217 AN₁b-A₂Ⅱ
218 AL₁Ⅱ
219 AL₁Ⅱ
220 AL₁Ⅱ
221 AL₁Ⅱ

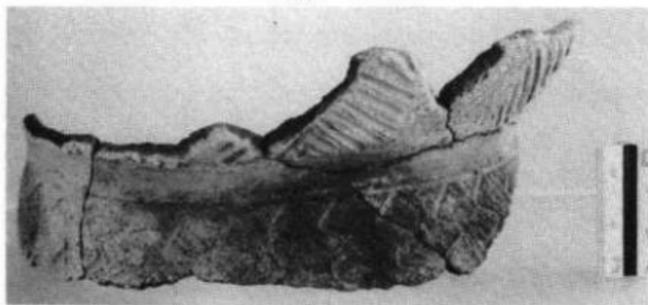


222 AK₁・2Ⅱ
223 AN₁b-B₂Ⅱ
224 AK₁Ⅱ
225 AK₁・2Ⅱ



226 AN₁b-B₁Ⅱ
227 AN₁b-B₁Ⅱ

228



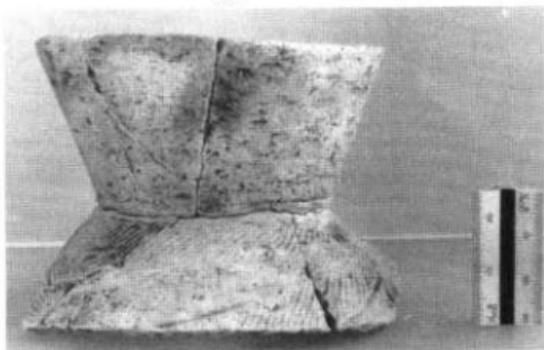
AK1Ⅱ

〔後期の土器〕第4群土器-228

☆ (228)は、AK1Ⅱ出土の「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」の中間型式である甕形土器である。

- このものの器形は、不明であるが、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむものようである。
- 施文は、口頸部に、「重山形文」、肩部に垂下する「S字状文」が施文される。
- 色調は、赤褐色である。(内外とも)
- このものは、口頸部の「重山形文」と肩部の「S字文」との組み合わせがわかる資料として示した。

229

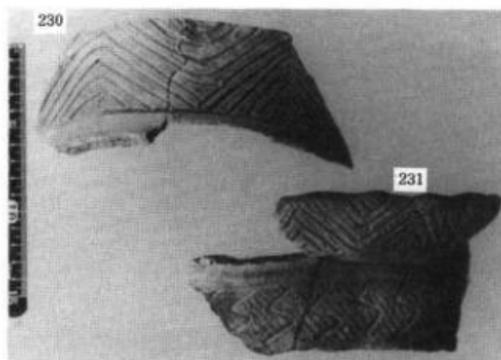


AN1b-B1II

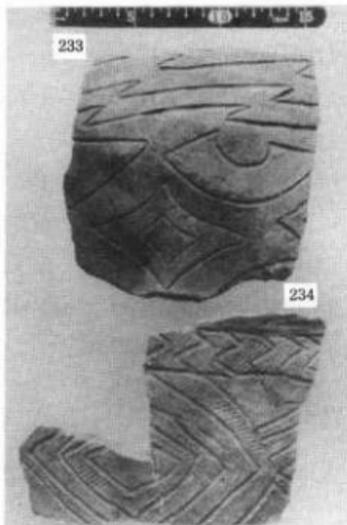
〔後期の土器〕第4群土器-229

☆ (229)は、AN1b-B1II出土の、「十腰内I式」「同II式」の中間型式である壺形土器である。

- 器形は、P・P・L22-162に示した壺形土器と同様の器形と思われる。
- 施文は、無文帯の口頸部と施文帯に分かれており、(162)と近似する施文のものらしい。
- 色調は、外面暗褐色、内面赤褐色を呈し、胎土・焼成は良い。

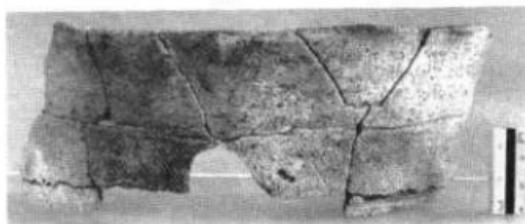


230 AK 2 ■
231 AK 1 ■
232 AK 2 ■
233 AK 2 ■
234 AK 1 ■



- ここに示した（230～234）も第4群土器として掲示したが文様の組み合わせの好例として掲げた。
- このうち、（232～234）のうち、（232・233）は、同一筒体で、一応第4群土器としたが、さらに新しい可能性もある。（234）は、施文パターンが「重菱形文」である。
- 色調は、外面暗褐色、内面黄褐色で、胎土・焼成は良い。

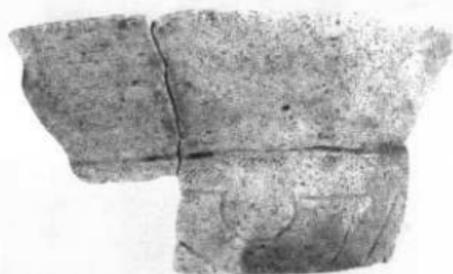
235



235 AN1b-B1 III

236 AN1b-B1 III

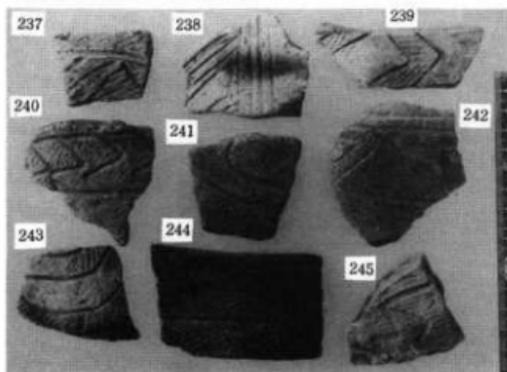
236



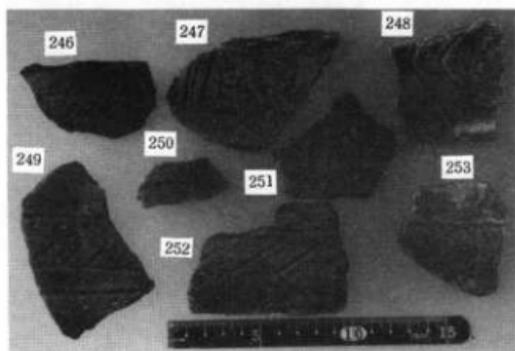
〔後期の土器〕第4群土器- 235・236

☆ （235・236）は、AN1b-B1 III出土の「十腰内I式」「同II式」の中間型式に位置する大形甕形土器破片である。

- 全体器形は不明だが、平縁で口頸部が外反し、肩部がふくらむものらしい。施文は、「無文帯-施文帯-無文帯」というパターンと思われる。
- 色調は、両者とも、内外ともに黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。

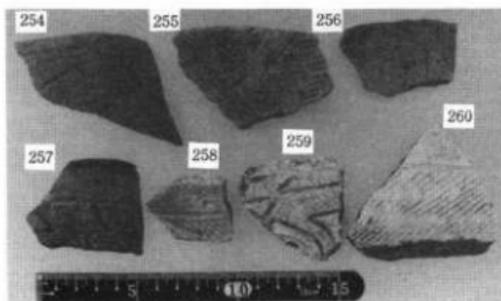


- 237 AN 1 b-B 1 II
- 238 AL 1 II
- 239 M 11 II
- 240 AL 1 II
- 241 AL 1 II
- 242 AL 1 II
- 243 AL 1 II
- 244 AL 1 II
- 245 M 11 II

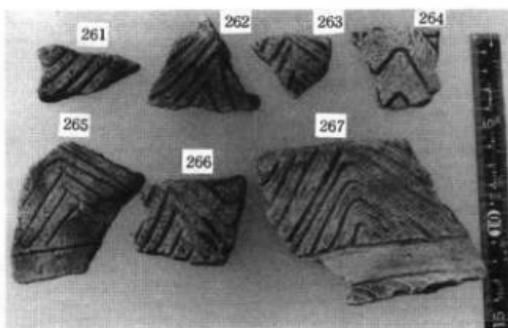


- 246 AK 1 II
- 247 AN 1 b-B 1 II
- 248 AK 1 II
- 249 AN 1 b-B 1 II
- 250 AK 2 II
- 251 AK 1 II
- 252 AK 1 II
- 253 AK 2 II

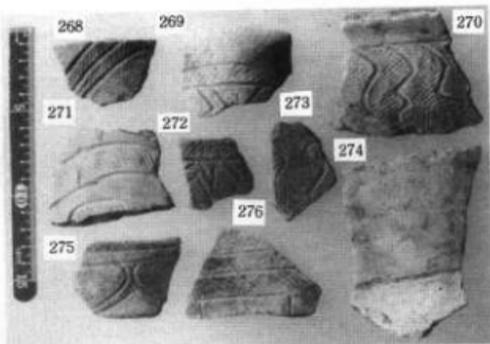
- 254 AK 1 II
- 255 AK 1 II
- 256 AN 1 b-B 1 II
- 257 AK 1 II
- 258 AK 1 II
- 259 AN 1 b-B 1 II
- 260 AN 1 b-B 1 II



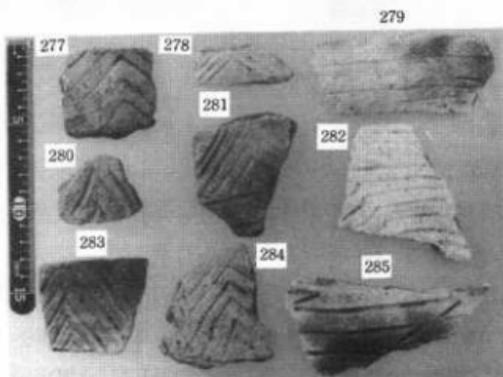
261 AK 1 II
 262 AK 1 II
 263 AK 1 II
 264 AK 2 II
 265 AK 2 II
 266 AK 2 II
 267 AK 2 II



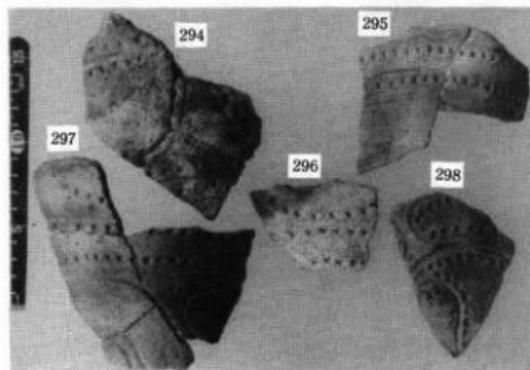
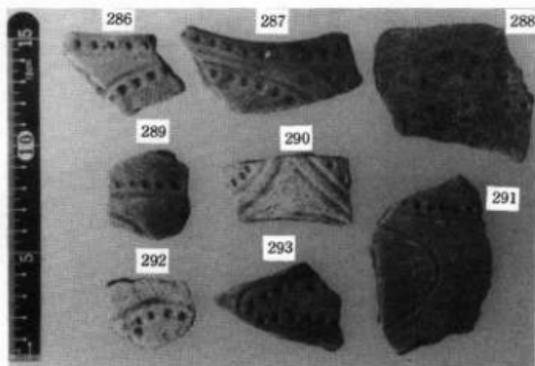
268 AK 1 II
 269 AN 1 b-B 1 II
 270 AL 1 II
 271 AK 2 II
 272 AK 1 II
 273 AN 1 b-B 1 II
 274 AL 1 II
 275 AL 1 II
 276 AK 1 II



277 AL 1 II
 278 AL 1 II
 279 AN 1 b-B 1 II
 280 AL 1 II
 281 AN 1 b-A 2 II
 282 AL 1 II
 283 AL 1 II
 284 AL 1 II
 285 AK 1 II



286 AN 1 b - B 1 Ⅱ
287 AN 1 b - B 1 Ⅱ
288 A L 1 Ⅱ
289 AN 1 b - A 2 Ⅱ
290 AK 2 Ⅱ
291 AN 1 b - B 1 Ⅱ
292 AN 1 b - B 1 Ⅱ
293 AN 1 b - B 1 Ⅱ



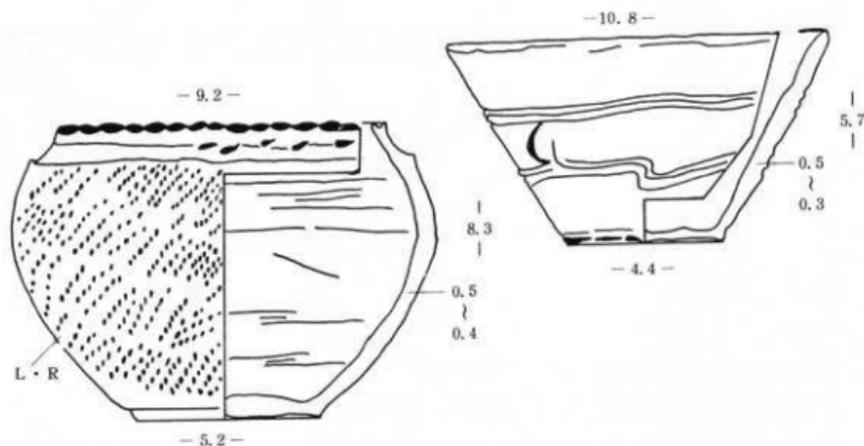
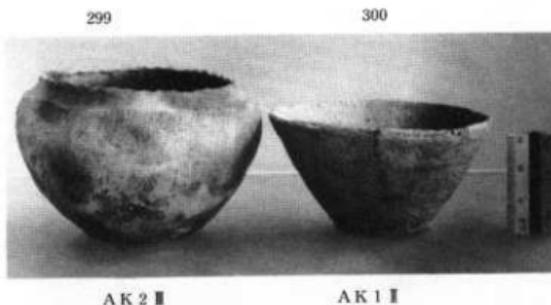
294 A L 1 Ⅱ
295 AN 1 b - B 1 Ⅱ
296 A L 1 Ⅱ
297 AN 1 b - B 1 Ⅱ
298 AN 1 b - B 1 Ⅱ

〔後期の土器〕 → 286 ~ 298

☆ ここに掲げたものは、第五群土器（十腰内Ⅱ式）である。いずれも破片であるが、器形は、甕～深鉢形のものと思われる。

☆ この「十腰内Ⅱ式」土器は、（表Ⅰ）に示したとおり第一次発掘調査から出土があった。本年度の出土は少なく、提示したもので全部である。

☆ 津軽半島西部では、何故かこの第五群土器の出土が少ない。



〔晩期・後期の土器〕第3・6群土器-300・299→(粗製)

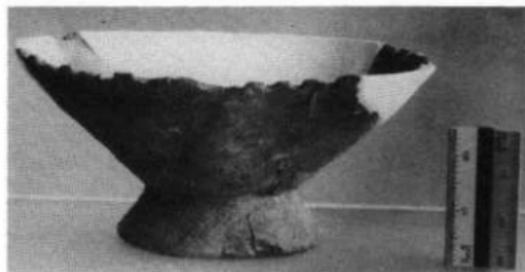
☆ (299)はAK2 III出土の「大洞C1式」無頸壺形土器、(300)はAK1 III出土の「十腰内I式」鉢形土器である。

- (299)は口縁が小波状を呈し、頸部は内傾し肩部が張る器形で底面はやや上げ底を呈する。
- (300)は、平縁で逆台形をなす器形で底面はやや上げ底である。

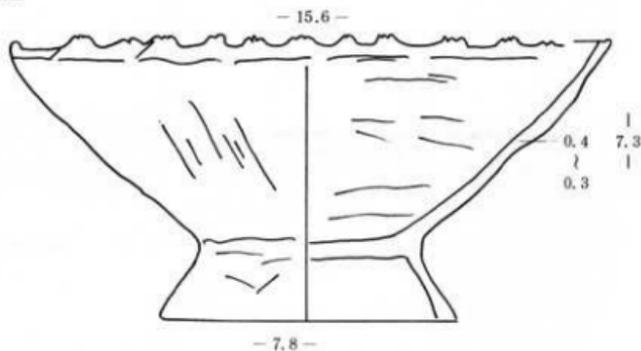
施文は、(299)は胴部に2段単節L・R縄文が施文される。(300)は細い3条の沈線文が2段に波状を呈して施文される。

- 色調は、(299)が内外とも赤褐色、一部黒色を呈する。(300)は内外とも赤褐色を呈し、(299・300)とも胎土・焼成ともに良い。

301



AK2 III



〔晩期の土器〕 第6群土器-301 (粗製)

☆ このものは、AK2 III出土の「大洞C1式」台付浅鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が連続する山型の小突起をもつもので、弱いふくらみをもつ浅鉢部を有するもので、台部は末広がりのものである。
- 施文はなく、無文のものであるが擦痕が認められる。
- 色調は、内外とも明黄褐色、胎土・焼成とも良く堅緻である。

302



AK2 III

-10.6-



〔晩期の土器〕第6群土器-302 (粗製)

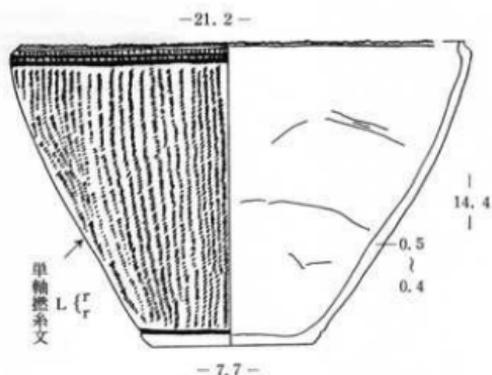
☆ (302)は、AK2 III出土の「大洞C1式」台付鉢形土器である。

- 器形は、口頸部は外反し、肩部は丸味をもってふくらみ、胴部もまたふくらむ器形で台部は欠失している。
- 施文は、波状口縁に不規則な刻目があり、肩部には平行沈線文が3条と刻目文が施文され、さらにその下に1条の沈線文があり、胴部には、縦位と左下りの縄文が施文される。
- 色調は、外面灰黒色、内面黄褐色一部灰黒色を呈する。胎土・焼成とも良い。

303



AN1b-B1Ⅱ



〔晩期の土器〕 第6群土器-303 (半精製)

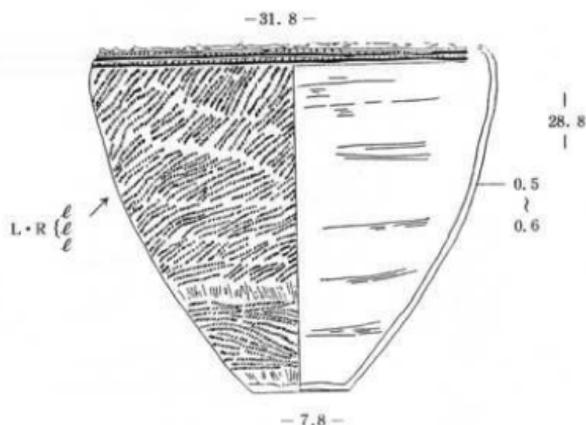
☆ この(303)は、AN1b-B1Ⅱ出土の「大洞C1式」鉢形土器である。

- このものは、口縁は小波状を呈し、口頸部が強く内傾し肩部が張る器形のもので、底面は平底である。
- 施文は、口頸部に刻目文と沈線文がめぐり、肩部下より底部へ縦位の単軸燃糸文が施文されるものである。
- 色調は、外面明黄褐色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

304



AN1b-B1Ⅱ



〔晩期の土器〕第6群土器-304（粗製）

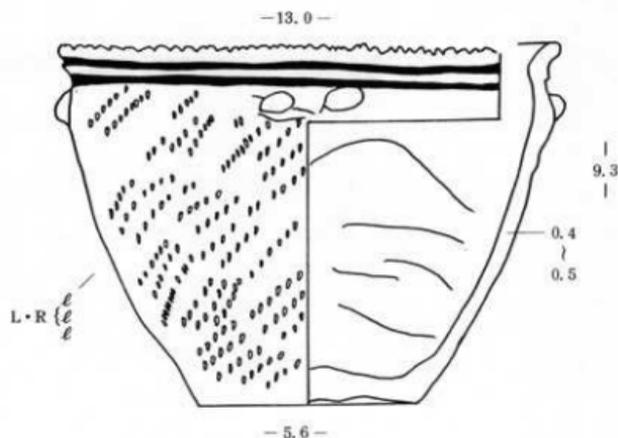
☆（304）は、AN1b-B1Ⅱ出土の「大洞C1式」大形鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむもので底面は上げ底を呈する。
- 施文は、口頸部に平行沈線文があり、この頸部～肩部上には「大洞C1式」の主文様である「刻目文」が二段に施文される。また、胴部には、縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色（下半赤褐色）、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成は良い。

305



AN1b-B1 II



〔晩期の土器〕 第6群土器-305 （粗製）

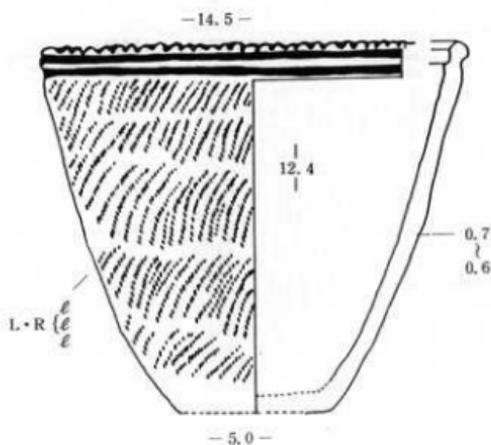
☆ （305）はAN1b-B1 II出土の「大洞C1式」鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁には刻目を有し小波状をなす。口頸部は外反するもので底面は上げ底を呈するものである。
- 施文は、頸部に2条の沈線文をめぐらせ、肩部には2こ1対の粘土粒を4対付すものである。施文されている縄文は粗であるが、0段多条のL・Rと思われる。
- 色調は、外面灰赤褐色、内面上半黒色下半赤褐色を呈し、胎土・焼成やや不良なものである。

306



AK 2 II

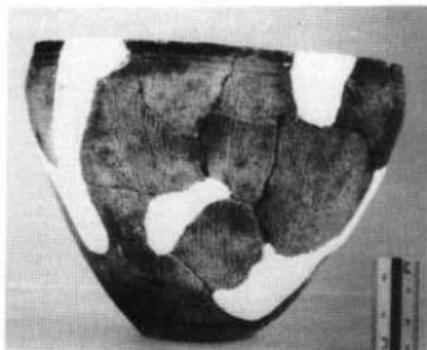


〔晩期の土器〕第6群土器-306（粗製）

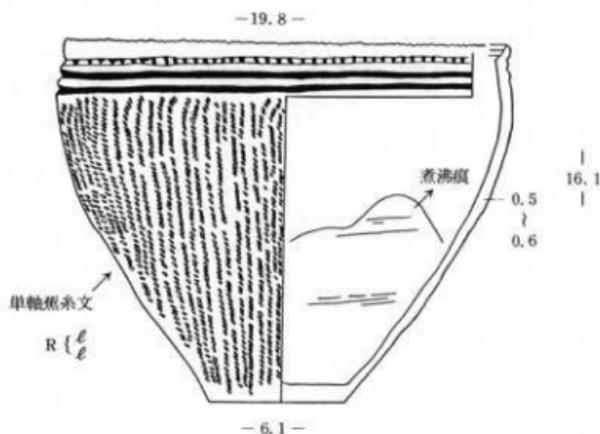
☆ このものは、AK 2 II出土の「大洞C 1式」鉢形土器である。

- 器形は、口縁に刻目を有し、肩部がわずかに張るもので、頸部に2条の沈線文がめぐるものである。
- 肩部下には、左下がりの縄文（0段多条）が施文される。
- 色調は、外面黒褐色一部赤褐色、内面明燈色を呈し、胎土には細砂を含み、器表面がザラザラしているが、焼成は良い。

307



AK 2 III

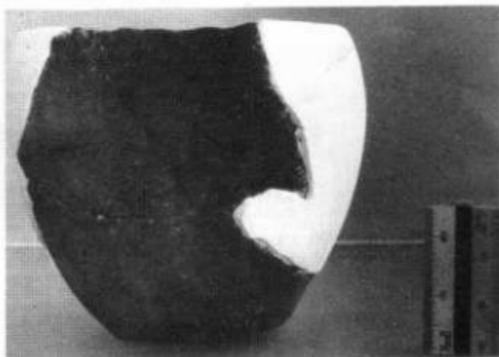


〔晩期の土器〕 第6群土器-307 （粗製）

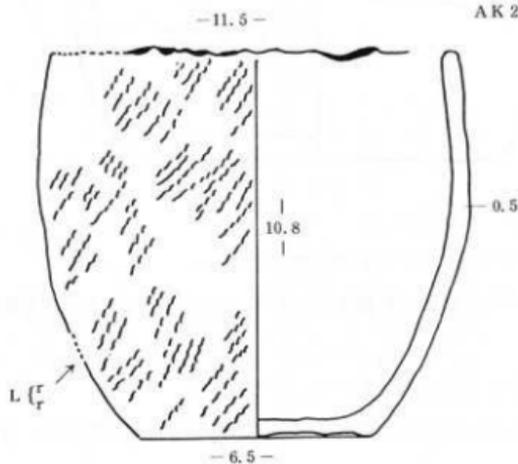
☆ （307）は、AK 2 III出土の「大洞C 1式」鉢形土器である。

- このものは、口頸部が外反し、肩部が丸味をもつ器形で底面は平底である。
- 施文は、頸部に刻目文があり、肩部に2条の沈線文がめぐり、肩部下より底部上までは縦走る燃糸文が施文されるものである。
- 色調は、外面黒褐色一部灰黒色、内面上半黒色下半黄褐色を呈する。胎土・焼成やや不良である。

308



AK 2 III



〔晩期の土器〕第6群土器-308 (粗製)

☆ この(308)としたものは、AK 2 III出土の「大洞C1式」鉢形土器である。

- 器形は、口縁が小波状を呈し、胴中央がふくらみ、底部がやや上げ底を呈するものである。
- このものは、口縁下より底部直上まで、撚糸による押圧縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面灰黒色を呈し、胎土・焼成とも良く堅緻なものである。

309



AK 2 ■

-12.0-



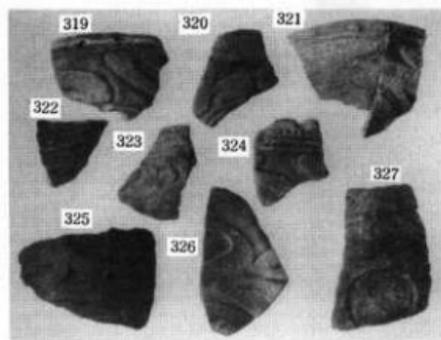
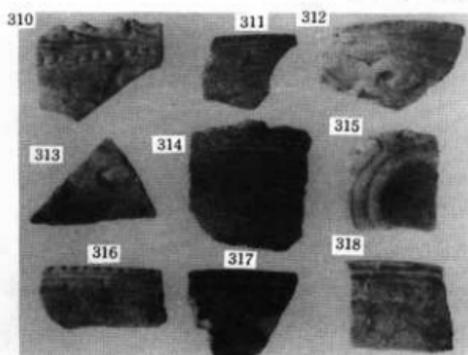
- 8.7 -

〔晩期の土器〕第6群土器-309 (粗製)

☆ (309) は、AK 2 ■出土の「大洞C 1式」浅鉢形土器である。

- この(309)は、器形が不整で、口縁が小波状を呈する。底面は不整な上げ底を呈する。(手づくね成形)
- 施文はなく、器表面、内面とも整形が悪いもので、凸凹がある。
- 色調は、外面灰黒色一部黄土色、内面粘土貼付を認める。内面は黄褐色である。胎土・焼成とも不良である。

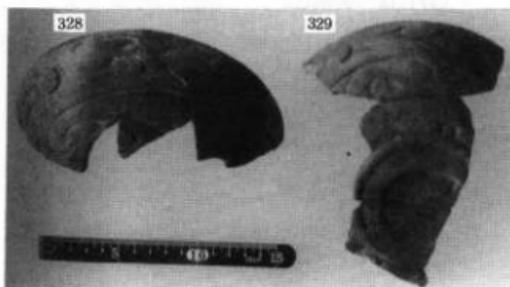
- | |
|------------------|
| 310 AL 1 Ⅱ |
| 311 AL 1 Ⅱ |
| 312 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 313 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 314 AK 2 Ⅱ |
| 315 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 316 AN 1 b-A 2 Ⅱ |
| 317 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 318 AN 1 b-B 1 Ⅱ |



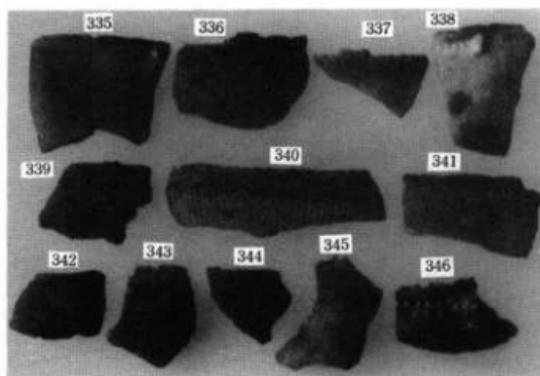
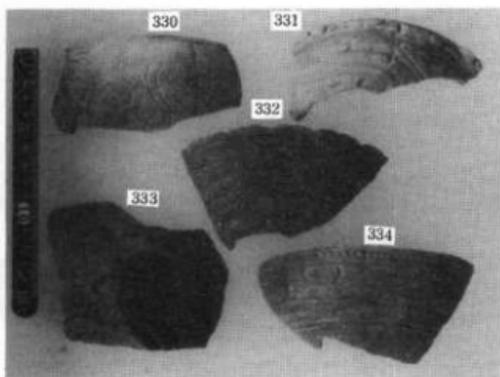
- | |
|------------------|
| 319 AK 2 Ⅱ |
| 320 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 321 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 322 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 323 AK 2 Ⅱ |
| 324 AK 2 Ⅱ |
| 325 AK 2 Ⅱ |
| 326 AN 1 b-A 2 Ⅱ |
| 327 AN 1 b-B 1 Ⅱ |

328 AK 1 Ⅱ

329 AK 2 Ⅱ



330 AK 1 Ⅱ
331 AL 1 Ⅱ
332 AK 2 Ⅱ
333 AK 2 Ⅱ
334 AK 2 Ⅱ

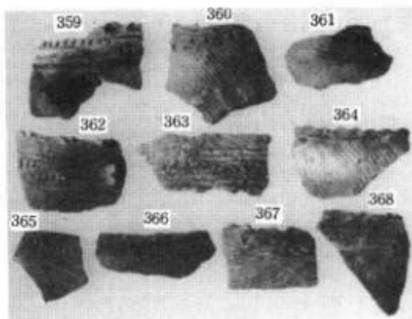
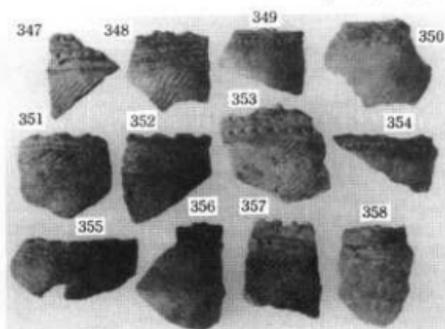


335 AN 1 b - B 1 Ⅱ
336 AK 2 Ⅱ
337 AK 2 Ⅱ
338 AK 2 Ⅱ
339 AN 1 b - B 1 Ⅱ
340 AL 1 Ⅱ
341 AK 2 Ⅱ
342 AN 1 b - B 1 Ⅱ
343 AN 1 b - B 1 Ⅱ
344 表採
345 AK 2 Ⅱ
346 AK 2 Ⅱ

〔晩期の土器〕 - (330～334)は精製土器、(335～346)は粗製土器である。

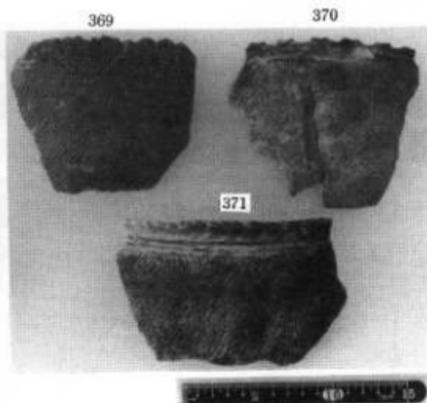
- (330)は、大洞BC式の可能性も否定できない。(332)は注口土器片(330・331・333・334)は皿形、(335～346)は、鉢形～深鉢形土器と思われる。
- いずれも第6群とした「大洞C1式」土器である。

- 347 AN1 b-A2 II
 348 AN1 b-B1 II
 349 AN1 b-B1 II
 350 AK2 II
 351 AK2 II
 352 AN1 b-B1 II
 353 AN1 b-B1 II
 354 AK2 II
 355 AK2 II
 356 AN1 b-B1 II

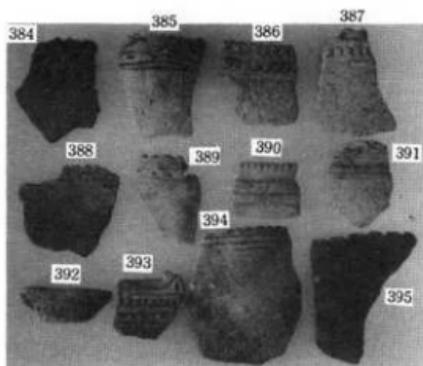
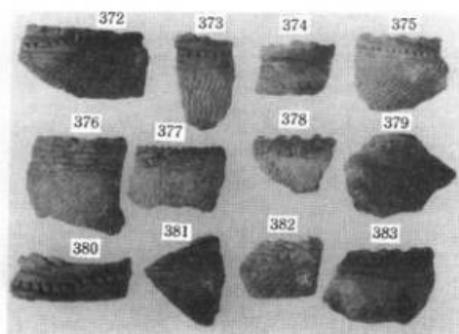


- 357 表採
 358 AL1 II
 359 AK2 II
 360 AN1 b-A2 II
 361 AN1 b-A2 II
 362 AL1 II
 363 AN1 b-A2 II
 364 AK2 II
 365 AK2 II
 366 AK2 II
 367 AK2 II
 368 AK1 II

- 369 AK2 II
 370 AK2 II
 371 AK2 II



372 AN1b-B1Ⅱ
 373 AN1b-B1Ⅱ
 374 AL2Ⅱ
 375 AK2Ⅱ
 376 AK2Ⅱ
 377 AN1b-A2Ⅱ
 378 AK2Ⅱ
 379 AK2Ⅱ
 380 AK2Ⅱ
 381 AK2Ⅱ
 382 AN1b-A2Ⅱ
 383 AK2Ⅱ



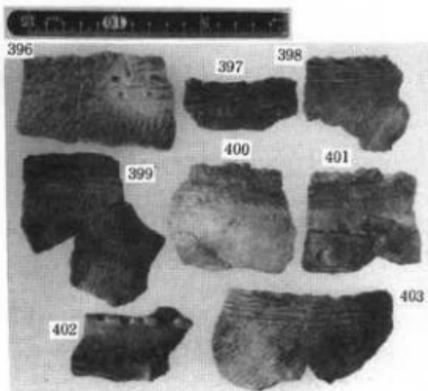
384 AL1Ⅱ
 385 AL1Ⅱ
 386 AL1Ⅱ
 387 AK2Ⅱ
 388 AL1Ⅱ
 389 AL1Ⅱ
 390 AK2Ⅱ
 391 AL1Ⅱ
 392 AN1b-A2Ⅱ
 393 AN1b-B1Ⅱ
 394 AK2Ⅱ
 395 AK2Ⅱ

☆ (390・393・401・402)

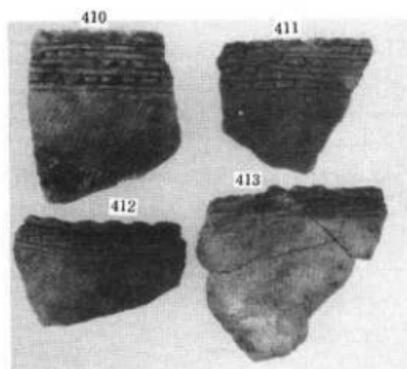
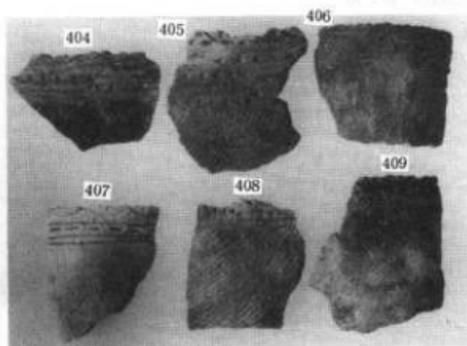
は精製・他は粗製土器である。

・ 器形は、鉢～深鉢形土器であろう。

396 AK2Ⅱ
 397 AK2Ⅱ
 398 AK2Ⅱ
 399 AN1b-B1Ⅱ
 300 AL1Ⅱ
 301 AK2Ⅱ
 302 AK2Ⅱ
 303 AK2Ⅱ



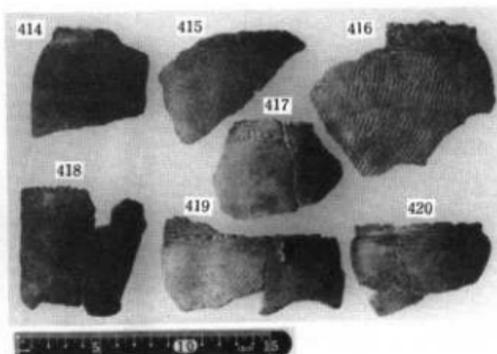
- | |
|------------------|
| 404 AK 2 Ⅱ |
| 405 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 406 AK 2 Ⅱ |
| 407 AL 1 Ⅱ |
| 408 AK 2 Ⅱ |
| 409 AK 2 Ⅱ |



- | |
|------------------|
| 410 AK 2 Ⅱ |
| 411 AK 2 Ⅱ |
| 412 AK 2 Ⅱ |
| 413 AN 1 b-B 1 Ⅱ |

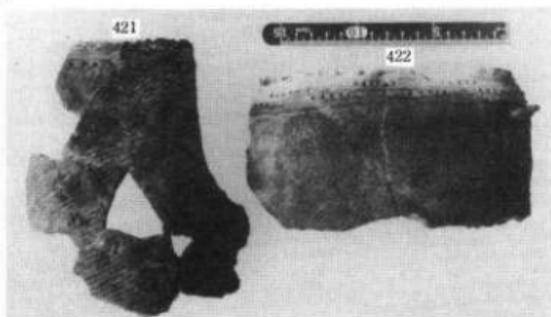
☆ (404 ~ 420) は、いずれも粗製土器
で器形は、鉢~深鉢形土器である。

- | |
|------------------|
| 414 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 415 AK 2 |
| 416 AK 2 |
| 417 AN 1 b-B 1 Ⅱ |
| 418 AK 2 |
| 419 AL 1 |
| 420 AN 1 b-B 1 Ⅱ |

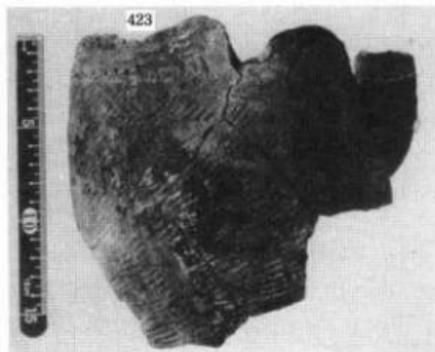


421 AL 1 II

422 AK 2 II



423



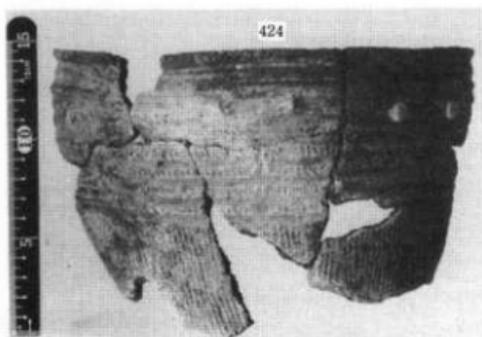
423 AK 2 II

☆(422・423)は、やゝ大形の深鉢形土器で粗製である。

両者は、第6群土器「大洞C1式」である。

第9群 424 AK 2 II

☆(424)は、第9群とした「大洞A式」深鉢形粗製土器である。

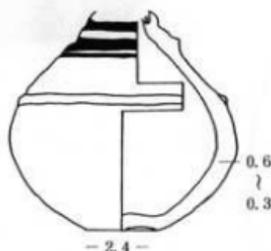
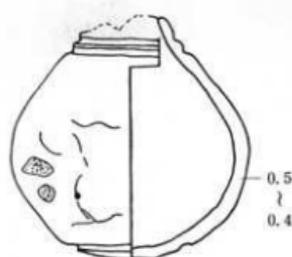




AK 2 III

AK 2 III 中

AN 1 b-B 1 III

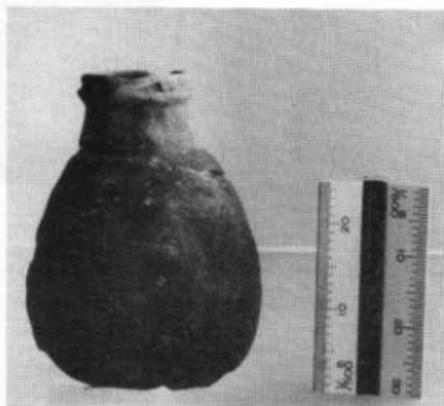


〔晩期の土器〕第7群土器-425・426・427（精製）

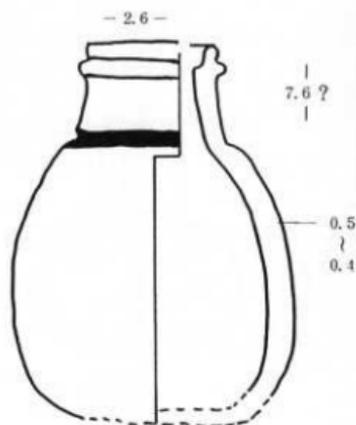
☆ ここに掲げた（425～427）は、AK 2 III、AN 1 b-B 1 III 出土の「大洞C 2 式」壺形土器である。

- 器形は、（425・426）は、この期の特徴を示す洋梨状をなすもので、（427）は、胴下位に最大幅をもつもので、やはりこの期の一タイプをなすものである。また底面は（425・427）は丸底、（426）は上げ底をなすものである。
- 施文は、沈線文がそれぞれ頸部～肩部、および胴部下に施文される。（452）は底部直上に施文される。
- 色調は、（425）は内外とも黒色、（426）は内外とも灰黒色なるも朱ぬり痕を認める。（427）は外面黒色、一部黄褐色、内面灰黒色を呈する。3 ことも胎土・焼成は良い。

428



AK 2 III



〔晩期の土器〕 第7群土器—428 （精製）

☆ （428）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」壺形土器である。

- 器形は、洋梨状を呈するもので、平縁のものであるが、現存約 $\frac{1}{2}$ 弱のもので底部は不明である。
- 施文は、口縁直下に隆帯をめぐらし、肩部には、沈線文が1条めぐり、胴部は無文で研磨されたものである。
- 色調は、外面黒褐色、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

429



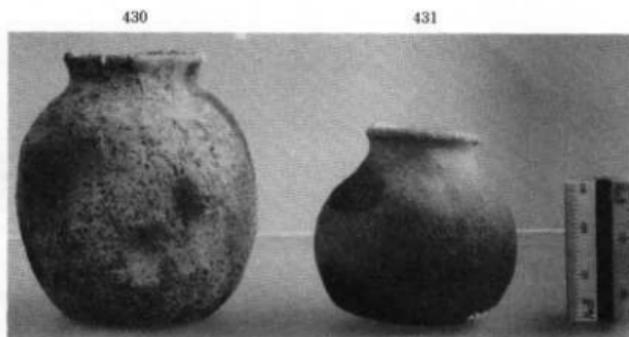
AK 2 Ⅲ



〔晩期の土器〕第7群土器-429 （粗製）

☆ このものは、AK 2 Ⅲ出土の「大洞C 2式」壺形土器である。

- 器形は、末広りの頸部をもち、胴中央下に最大幅を有する器形で、やはりこの期のタイプと認められるものであろう。なお底面はわずかに上げ底である。
- 施文は、頸部、肩部に各1条の沈線文が施文されるが他は無文である。
- 色調は、器内外とも灰褐色で、胎土・焼成とも良い。また一部に朱ぬり痕が認められる。



AK 2 Ⅲ

AN 1 b - B 1 Ⅲ

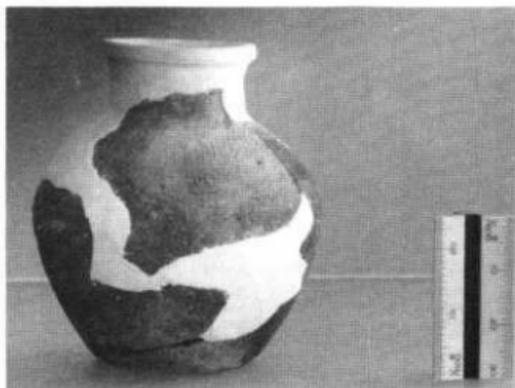


〔晩期の土器〕 第7群土器— 430・431 （粗製）

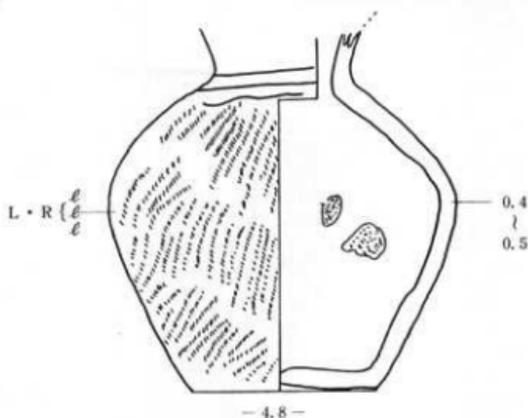
☆ ここに示した（430・431）は、それぞれAK 2 Ⅲ、AN 1 b - B 1 Ⅲ出土の「大洞C 2 式」壺形土器である。

- 両者とも口縁は平縁で頸部はせまく胴部がふくらむ器形である。また底面は、（430）は上げ底・（431）は不整であるが一部剥離している。
- 色調は、（430）は灰黒色、（431）は灰白色を呈する。胎土・焼成は前者は悪く、後者は最良である。

432



AK 2 III



〔晩期の土器〕 第7群土器-432 （粗製）

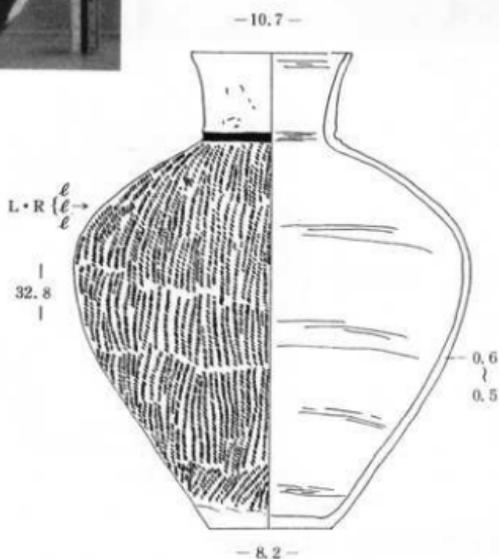
☆ （432）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」壺形土器である。

- 欠失しているため、口縁は不明であるが、復原写真のようになると思われる。
すなわち、口頸部は外反し、口縁は肥厚するものであろう。肩部が張らず最大幅は、ほぼ胴中央にある器形で底面は、わずかに上げ気味のものである。
- 施文は、肩部に沈線文が1条、胴部には、0段多条のL・R縄文が左下がりに施文される。
- 色調は、外面黄褐色、一部黒色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成は良い。

433



AK 2 ■



〔晩期の土器〕 第7群土器— 433 （粗製）

☆ （433）は、AK 2 ■出土の「大洞C 2式」大形壺形土器である。

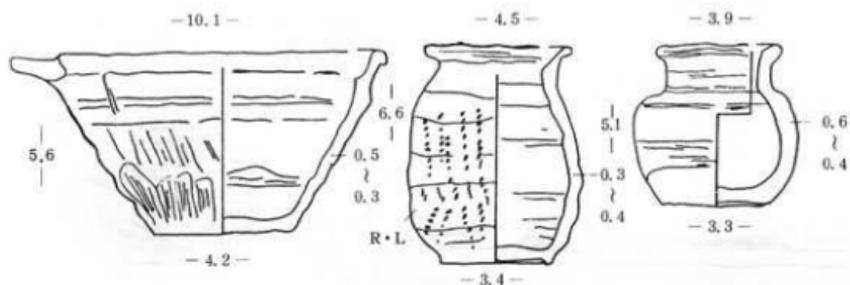
- このものは、口頸部が直立に近く、肩部が張らず最大幅は中央より上部にある器形で底面は平底である。
- 施文は、肩部に1条の沈線文があり、胴部には縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。



434
AK 2 Ⅱ

435
AK 2 Ⅱ

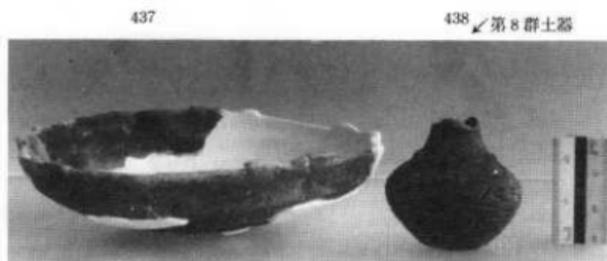
436
AN 1 b-B 1 Ⅱ



〔晩期の土器〕第7群土器— 434・435・436 （粗製）

☆（434・435・436）は、AK 2・AN 1 b-B 1 Ⅱ出土の「大洞C 2式」土器である。なお（434）は片口付鉢形、（435・436）は小形壺である。

- 器形は、（434）は、口頸部が外反し肩部が張るこの期のノーマルな器形の鉢形に、片口が付いたもので、（435・436）は、小形壺のそれぞれタイプをなす器形である。すなわち、（435）は長胴、（436）は肩部の張る短い胴部をもつタイプである。
- 施文は、（434）は無文であるがケズリ状の整形痕がある。（435）は、R・Lの縄文があり、（436）は横方向の整形痕があるが無文である。
- 色調は、（434）は灰黒色、（435）は赤褐色、（436）は赤褐色を呈する。胎土・焼成は良いが、（435）はやや悪い。

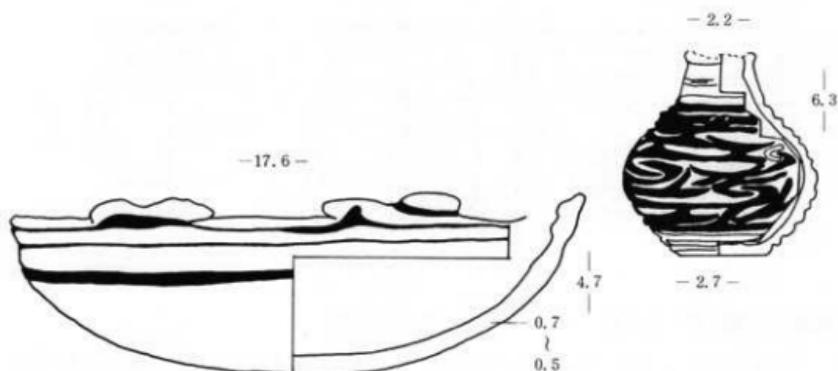


437

438 第8群土器

AK 2 III

AK 2 III

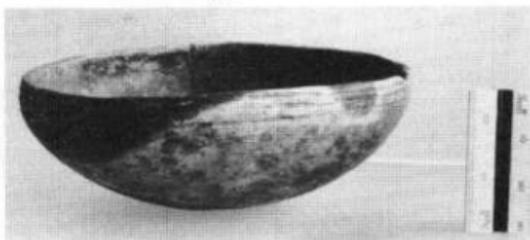


〔晩期の土器〕 第7・8群土器— 437・438 （精製）

☆ （437）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」皿形土器、（438）は、AK 2 III出土の「大洞C 2-A式」→（仮称）壺形土器である。

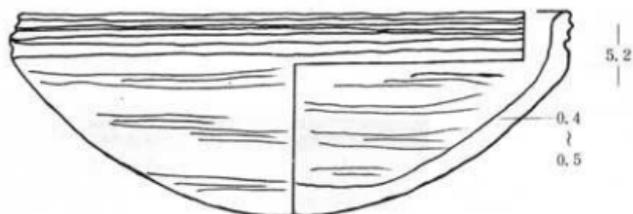
- （437）は、2こ1対の突起を4対付すもので平縁である。口頸部は、やや外反するが肩部がふくらむ器形で丸底である。
- （438）は、第8群土器として分類したもので、器形は洋梨状を呈するもので底面は平底である。
- 色調は、（437）は朱ぬり土器で外面灰黒色一部黄褐色、内面灰黒色を呈する。（438）は、やはり朱ぬり土器で、内・外とも灰赤色を呈する。両者とも胎土・焼成は最良である。

439



AL 1 III

- 14.3 -



〔晩期の土器〕第7群土器-439 (精製)

☆ (439) としたものは、AL 1 III 出土の「大洞C 2 式」皿形土器である。

- このものの器形は、口頸部がゆるく外反し、肩部が張る器形で胴部は、丸味をもつもので底面は丸底のものである。
- 施文は、頸部に3条の沈線文をめくらせるもので、肩部下は無文研磨されたものである。
- 色調は、外面赤褐色、一部黒色、内面黒色、一部赤褐色を呈し、朱ぬり痕を認めるものである。胎土・焼成とも最良である。

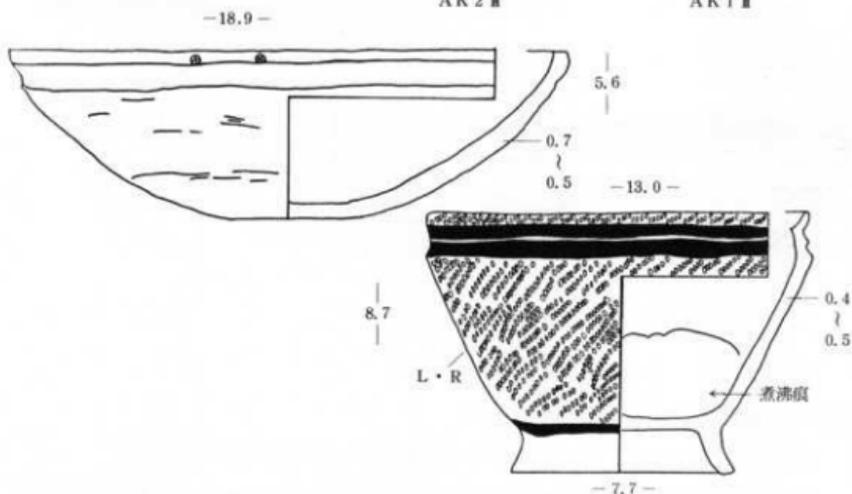
440

441



AK 2 Ⅲ

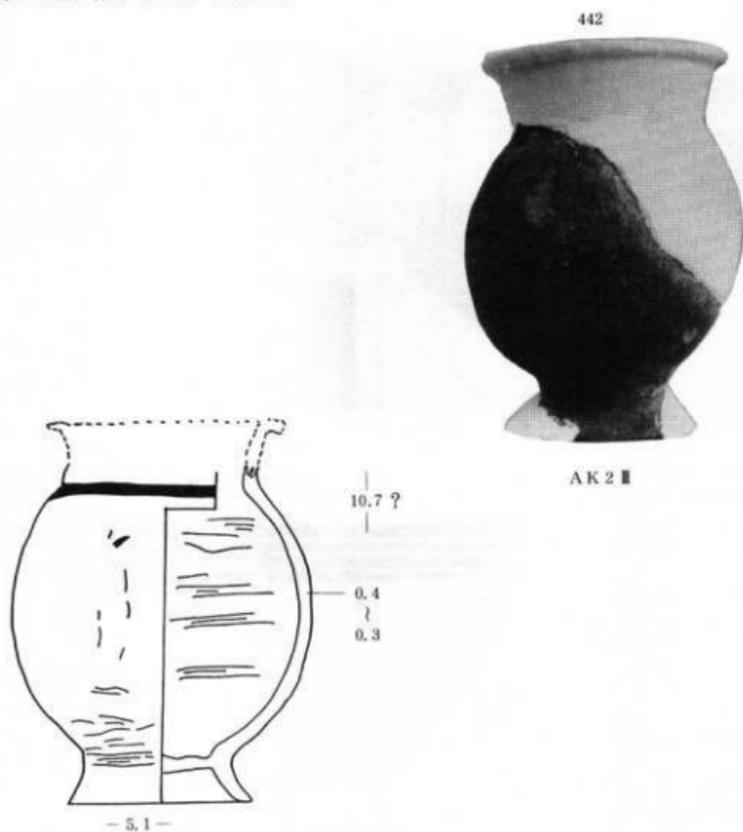
AK 1 Ⅲ



〔晩期の土器〕第7群土器—440・441（精製・粗製）

☆（440）はAK 2 Ⅲ、（441）はAK 1 Ⅲ出土の皿形、台付鉢形土器で両者とも「大洞C 2式」土器である。

- 器形は、（440）は、平縁でわずかに肩部が張り気味のもので中形の皿としては浅い器形である。（441）は、口頸部が外反し肩部が張る器形で鉢としては、やや寸づまりのものである。
- 施文は、（440）には太い沈線文があるが、胴部は無文で研磨されている。（441）は、頸部に2条の沈線があり、胴部下端にも1条めぐる。胴部には二段単節L・R縄文が施文される。
- 色調は、（440）は暗褐色を呈し、朱ぬり痕がある。（441）は、鉢部黒色、台部赤褐色を呈する。胎土・焼成は両者とも良い。



〔晩期の土器〕 第7群土器-442 （精製）

☆ （442）は、AK2 III出土の「大洞C2式」台付壺形土器である。

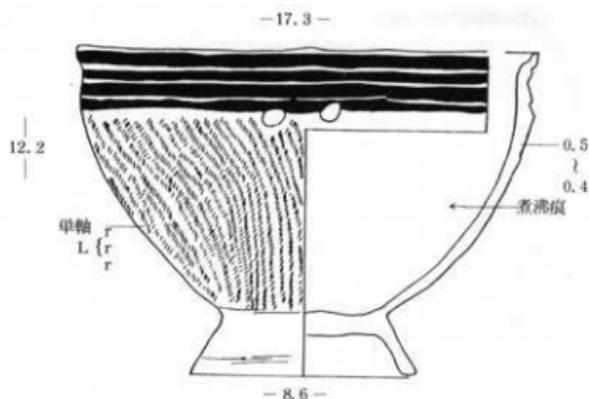
- 器形は、口頸部が欠失しているが、壺形土器に台部の付くものは珍しいものである。
- 施文は、肩部に1条の沈線文の他は無文であるが、器面は研磨され平滑面をなすものである。
- 色調は、外面灰黒色を呈し、内面は灰褐色をなす。胎土・焼成とも最良なものである。

☆ この土器を一応「大洞C2式」としたが類似を待って、さらに考えたい。

443



AK 2 II



〔晩期の土器〕 第7群土器— 443 （粗製）

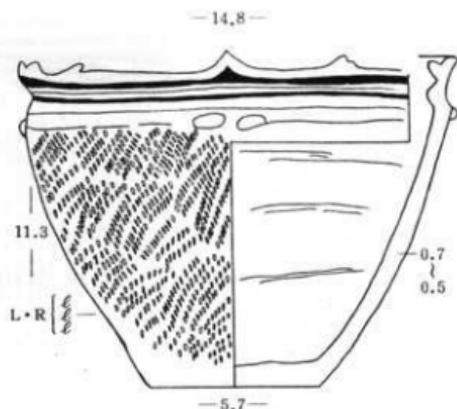
☆ （443）は、AK 2 II出土の「大洞C 2式」台付鉢形土器である。

- このものの器形は、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむ器形で、鉢部が丸味をもっている特徴がある。
- 施文は、口頸部に4条の沈線文がめぐり、2こ1対の粘土粒が4対付くもので胴部には、単軸燃糸文（L { $\frac{r}{r}$ ）が密に施文されるが台部は無文である。
- 色調は、外面黒褐色、内面黒色を呈し、煮沸痕がある。胎土・焼成とも良い。

444



AN1b-B1II

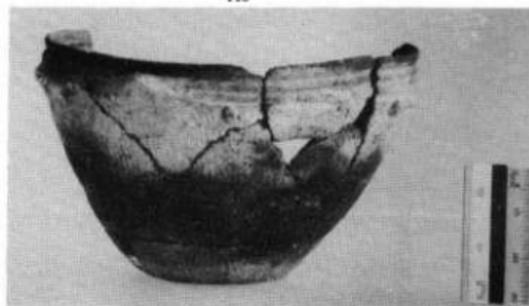


〔晩期の土器〕 第7群土器-444 （半精製）

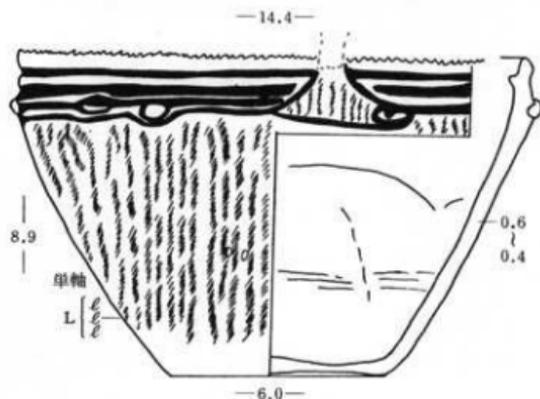
☆ （444）はAN1b-B1II出土の「大洞C2式」鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が波状口縁で、4この山型突起と、その中間に4この小突起が付けられるものである。また、口頸部が外反し、肩部が張る器形で底面は平底である。
- 施文は、頸部に2条の沈線がめぐり、肩部には2こ1対の粘土粒が付けられ、胴部には、L・R縄文が左下がりに斜行する。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面赤褐色で煮沸痕を認める。胎土・焼成は良い。

445



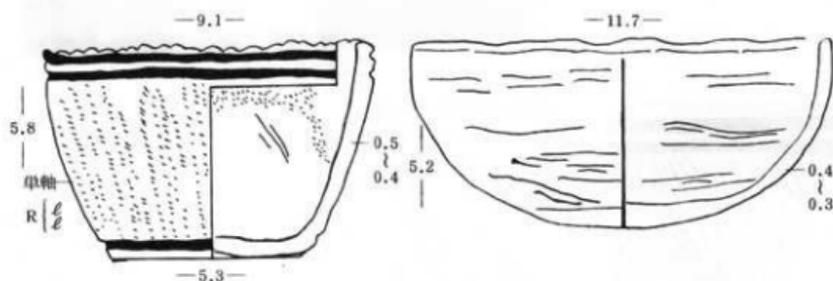
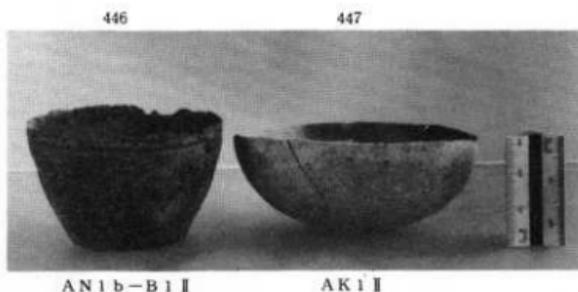
AK 2 III



〔晩期の土器〕 第7群土器-445 （粗製）

☆ (445) は、AK 2 III 出土の「大洞C 2 式」鉢形土器である。このものには、1 この把手があったものらしいが欠失している。

- 器形は、口縁が刻目をもち、小波状を呈する。頸部は外反し肩部が張るもので底面は上げ底である。
- 施文は、頸部に3条の沈線文があり、肩部のものは、粘土粒の間をめぐっているが粘土粒は2こ1対すつ4対付くものらしいが欠失している。胴部には、単軸燃糸文が縦位に施文される。
- 色調は、外面上半赤褐色、下半黒色、内面上半黒色、下半赤褐色を呈する。胎土・焼成はやや良い。

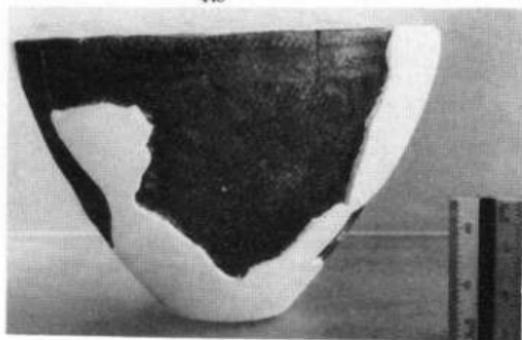


〔晩期の土器〕 第7群土器-446・447 （粗製・精製）

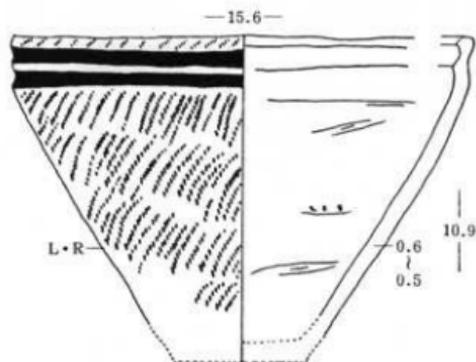
☆ (446・447) は、AN1b-B1II、AK1II 出土の「大洞C2式」小形鉢形、碗形土器である。

- (446) の器形は、口縁が小波状を呈し、頸部が外反気味で、肩部もわずかに張る器形である。底面もまた中央部が上げ底である。(447) は、平縁で、口縁はやや不整であるが、分類は皿形としたが碗形に近い器形である。
- 施文は、(446) は、頸部に2条の沈線文があり、また底部直上にも1条の沈線文が施文される。胴部には、単軸撫糸文がある。(447) は、無文で器表面が平滑面をなしている。
- 色調は、(446) は内外とも褐色～黒色、(447) は、内外とも灰黄褐色を呈し、胎土・焼成は(446) はやや不良、(447) は良い。

448



AK 2 III

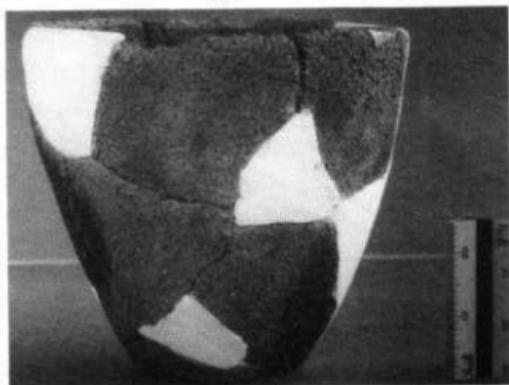


〔晩期の土器〕 第7群土器—448 （粗製）

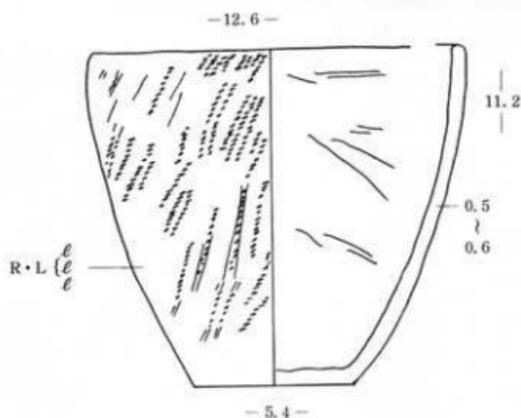
☆ （448）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で頸部は外反するもので肩部はやや張る器形である。
- 施文は、頸部に2条の沈線文をめぐるせ、胴部には2段単節縄文が施文されている。
- 色調は、内外とも黒色で、胎土・焼成は良好である。

449



AL1 III

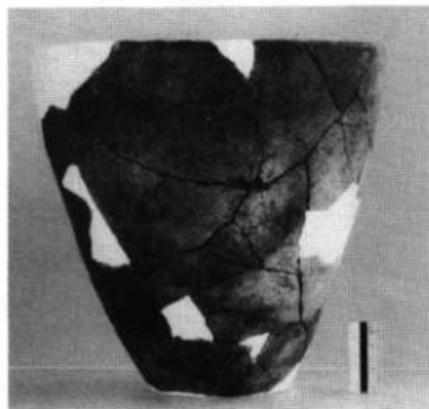


〔晩期の土器〕 第7群土器- 449 （粗製）

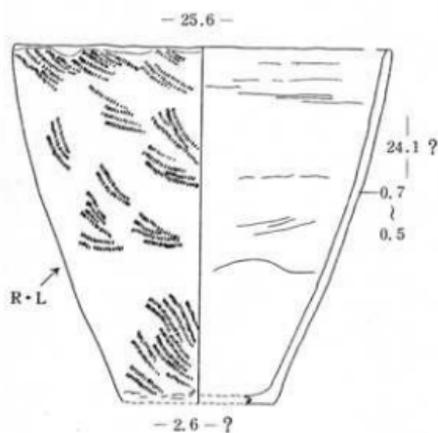
☆ (449) は、AL1 III 出土の「大洞C 2式」鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部は内傾する器形で、底面は平底を呈する。
- 施文は、一部消えているが左下がりに斜行する縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面灰黄褐色、一部黒色、内面黄褐色を呈し、胎土、焼成ともやや悪い。

450



AK 2 II



〔晩期の土器〕 第7群土器- 450 （粗製）

☆ （450）は、AK 2 II 出土の「大洞C 2 式」深鉢形土器である。

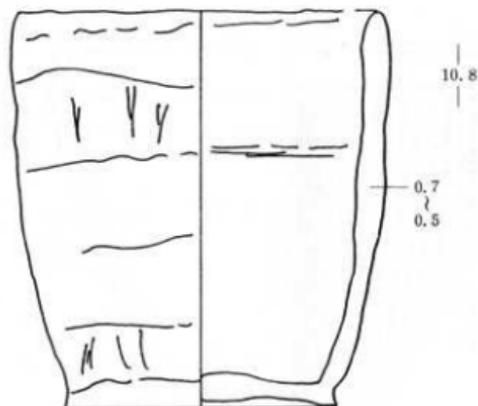
- このものの器形は、口頸部がわずかに内傾気味のもので、肩部が丸味のある器形で、底面は上げ底である。
- 施文は、口縁直下より右下りのR・L縄文が施文されるものであるが、風化のためか、部分的に観察される。
- 色調は、黒褐色で、内面も同様であるが一部黄褐色を呈する。胎土・焼成ともやや悪いもので、器表面はザラザラする。

451



AK2 III

-10.2-



-7.5-

〔晩期の土器〕第7群土器-451 (粗製)

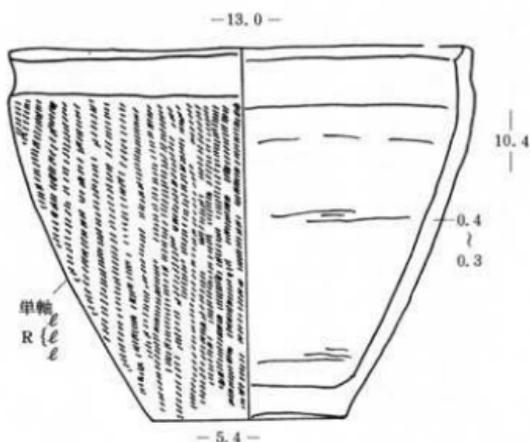
☆ (451)は、AK2 III出土の「大洞C2式」深鉢形土器である。

- このものの器形は、頸部がやや内傾するが、殆んど円筒形に近い器形のものである。わずかに底部直上がしぼまり、底面は上げ底である。
- 施文はなく、器表面に凹凸があつて整形も粗末である。
- 色調は、内外とも黄褐色を呈する。胎土・焼成はやや良い。

452



AK 2 II

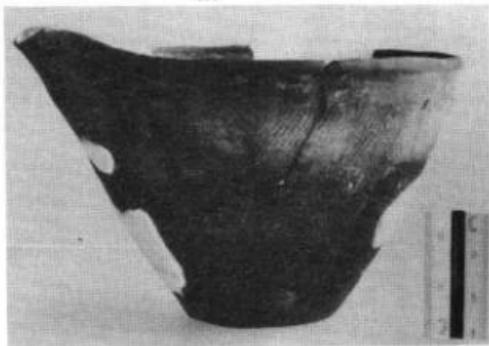


〔晩期の土器〕 第7群土器—452 （粗製）

☆ （452）は、AK 2 II出土の「大洞C 2 式」鉢形土器である。

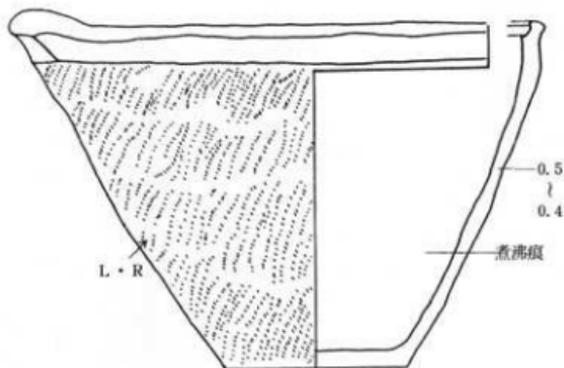
- このものの器形は、口頸部が外反し、肩部がやや張る器形で底面は上げ底を呈する。
- 施文は、頸部に幅の広い無文帯をもち、胴部には、単軸捺糸文を施文するものである。
- 色調は、内外とも黒色を呈し、胎土・焼成とも最良のものである。

453



AK 2 II

- 18. 1 -



- 16. 1 -

〔晩期の土器〕第7群土器- 453 （粗製）

☆ （453）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」片口付鉢形土器である。

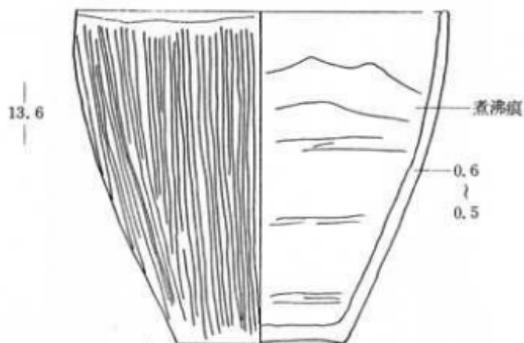
- 器形は、わずかに外反する頸部で、肩部の張りもゆるく平底である。
- 頸部には幅の広い無文帯をもち、胴部には、二段単節縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、内外とも黒色、一部灰褐色で、胎土・焼成とも良いものである。

454



AN1b-B1II

-15.5-

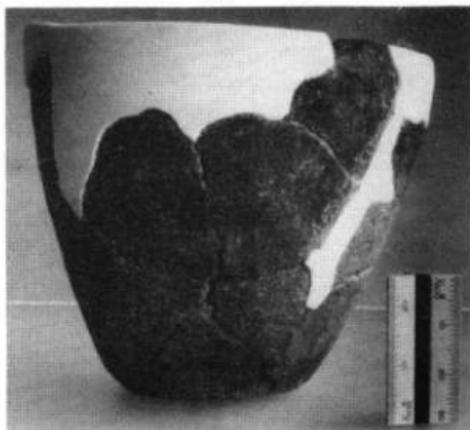


〔晩期の土器〕 第7群土器-454 （粗製）

☆ このものは、AN1b-B1II出土の「大洞C2式」鉢形土器である。

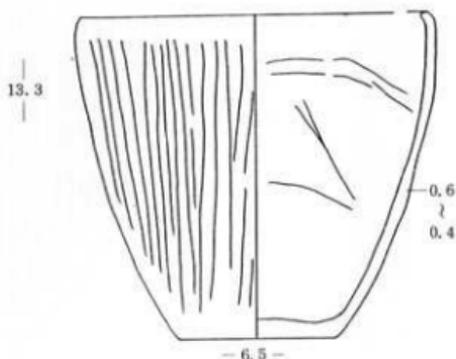
- 器形は、口縁が平縁で、肩部の張らないもので、口頸部がやや内傾する器形である。なお底面は、上げ底である。
- 施文は、口縁上端が無文で、他の胴～底部直上までは条痕文が施文される。
- 色調は、外面黄褐色一部黒色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成ともに良い。

455



AN1b-B1 II

-19.7-



〔晩期の土器〕 第7群土器-455 （粗製）

☆ （455）は、AN1b-B1 II出土の「大洞C2式」鉢形土器である。

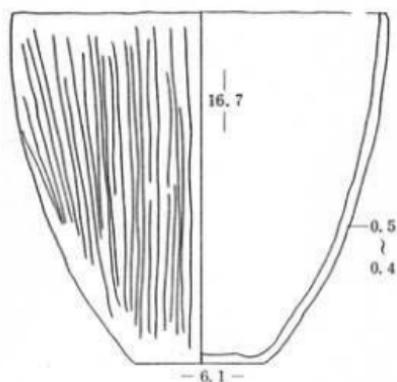
- 器形は、平縁で口頸部が内傾し、肩部が丸味をもつ器形で、底面は平底をなすものである。
- 施文は、（454）と同様、条痕文が施文されるが、前者に比べて条痕文が密でないのが、このものの特徴であろう。
- 色調は、外面黄褐色、内面灰褐色で胎土・焼成とも良い。

456



AN1b-B1II

-18-

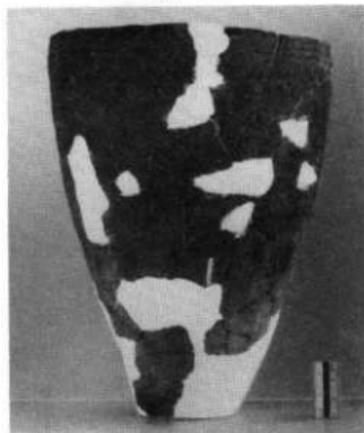


〔晩期の土器〕 第7群土器-456 （粗製）

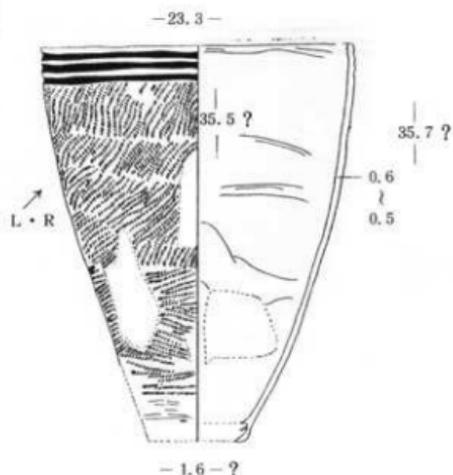
☆ この（456）は、「大洞C2式」深鉢形土器である。（AN1b-B1II出土）

- このものの器形は、平縁で口頸部がわずかに内傾するが、肩部が張らず、ややふくらみをもつ胴部から底部に至るもので、底面は平底である。
- 施文は、（454・455）と同様、条痕文が施文されている。この条痕文が施文される土器は、口縁直下が無文帯をなすのが共通する。
- 色調は、外面灰黒色、内面上半灰黒色、下半黄褐色、胎土・焼成は良い。

457



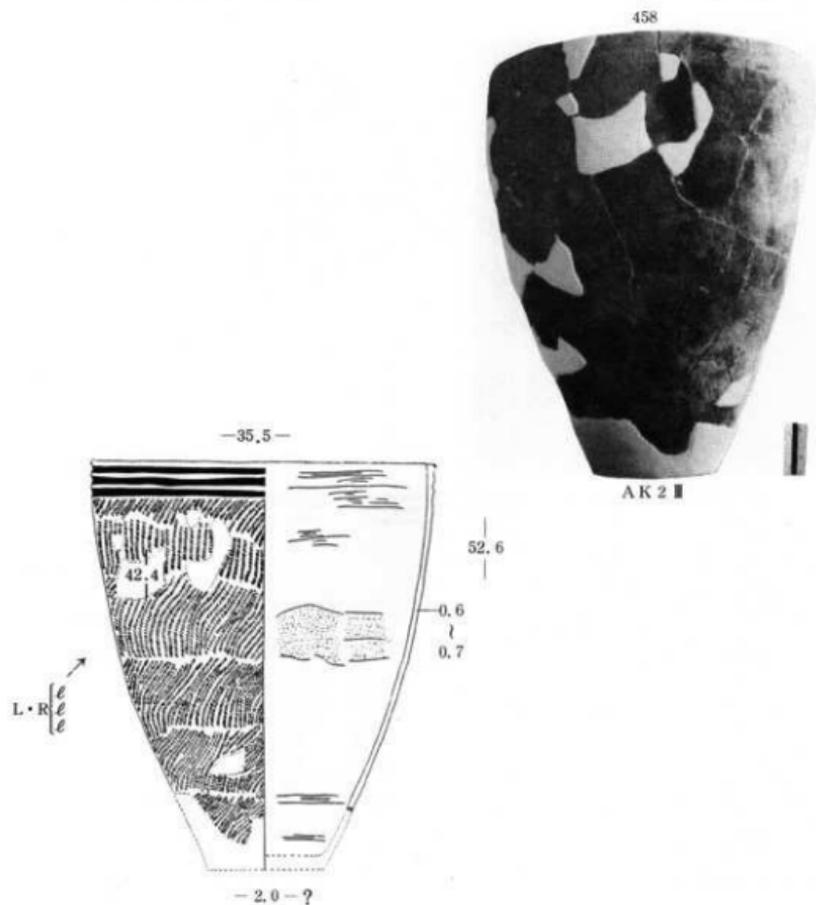
AK 2 III



〔晩期の土器〕 第7群土器—457 （粗製）

☆ （457）は、AK 2 III出土の「大洞C 2式」大型深鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部がわずかに内傾気味のもので、肩部の張らないスナリした器形のものである。
- 施文は、口頸部に3条の平行沈線文があり、肩部下には左下りの斜行縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面赤褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。



〔晩期の土器〕 第7群土器—458 （粗製）

☆ （458）は、AK2 II出土の「大洞C2式」大形深鉢形土器である。

- この土器の器形は、口縁が平縁で、口頸部はわずかに内傾気味のものである。また肩部は、わずかにふくらむ器形で、底面はやや上げ底気味のものと思われる。
- 施文は、頸部に平行沈線文が3条、肩部下には、やや左下りの縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面黒褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。